

## 沖縄戦跡慰霊の旅

川島 順 予科 21-7  
(越谷市) 航空 7-1

私にとっては沖縄訪問は初めてであった。2015年11月にアジア弁理士会(APAA)の総会が沖縄で開催されたので、その機会を利用して、大東亜戦争で戦場となった沖縄の戦跡を慰霊訪問することにした。私が宿泊したホテルは沖縄本島の中西部の宜野湾を望むラグナガーデンホテルであった。

1945年4月1日米軍は、この宜野湾の北側の渡具地海岸に強行上陸を開始し、約3ヶ月かけて日本軍を本島南部の摩文仁に追い詰め沖縄を占領した。



私は、先ず米軍の上陸した渡具地海岸から出発し、それから南下し米軍の侵攻した道順に沿って、戦跡を訊ねることとした。

各戦跡を訪ねる前の予備知識として、沖縄戦の概要を記載しながら話を進める。

米軍は沖縄侵攻の前哨戦として昭和20年3月26日沖縄本島の西北にある慶良間諸島の座間味島などに上陸を開始し、29日迄に慶良間諸島全島を占領し、155mmカノン砲24門を配置し、本島への砲撃を開始した。

4月1日、米軍は、戦艦10隻、巡洋艦9隻、駆逐艦・砲艦210隻の援護の下に本島中西部の渡具地海岸に上陸を開始した。日本軍はサイパン戦の教訓から初めから水際作戦を放棄していたので、米軍はその日の内に6万名を陸揚げさせ、北飛行場及び中飛行場（現在の嘉手納飛行場）を占領した。最終的に上陸した米軍の兵力は第10軍司令部（司令官サイモン・バックナー中将）傘下の18万3千人、戦車約500両であった。

一方、沖縄本島の守備隊の主力は牛島中将の率いる第32軍で、本来は第9師団、第24師団、第62師団の3個師団の編成であったが、沖縄戦の直前、第9師団が台湾守備のため抽出されてしまい、海軍部隊1万名、現地徴用した補充兵等2万名を含めても総兵力12万名で、その内精鋭部隊は4万名に過ぎなかった。

しかし、第32軍は400門を超える強力な砲兵部隊を傘下に持っていた。第32軍の作戦は、当初は強力な砲兵部隊に援護された精鋭3個師団で水際で米軍を追い落とす手筈であったが、第9師団が引き抜かれ、増援の独立混成第44旅団の輸送船が米軍潜水艦に撃沈されたので、急遽、持久作戦に切り替えられ、多数の洞窟が点在する本島南部地区に兵力を集中し、軍司令部を首里に置き、その周辺に無数の洞窟陣地を構築し、敵を迎え撃つことにした。

### ●米軍上陸地点

私は、最初に渡具知海岸の米軍の上陸地点に向かった。



米軍が最初に上陸した渡具知海岸

上陸記念碑は北谷町砂辺と比謝川河口の読谷村渡具知の2箇所にある。



北浜町砂辺の上陸記念碑



読谷村の上陸記念碑 後ろに海が見える

また渡具知の海辺の丘には海軍の特攻艇「震洋」（一説には陸軍の「マルレ」）の秘匿壕が数カ所設けられていた。今では地元の人が釣り船などの倉庫に使用している。ここに配置された震洋は水際作戦中止により結局使用されなかった模様である。



特攻艇を秘匿した洞窟

## ●北飛行場

更に北上すると陸軍の北飛行場跡がある。陸軍は本島に北飛行場と中飛行場の2つを持っていた。中飛行場は現在の嘉手納飛行場で米軍の管轄になっている。北飛行場は現在米軍の管轄地であるが使用されて居らず、雑草が生えた原っぱのままで、所々に滑走路の跡がある。



北飛行場の滑走路の跡

昔の飛行機の防空用の掩体が残っていた。その隣に、「義烈空挺隊」の玉砕の碑が建てられていた。



防空用の飛行機の掩体

「義烈空挺隊」とは、5月24日には米軍が占領した北飛行場を破壊するために、熊本より出撃させた97式重爆12機よりなる特攻空挺隊のことで、大部分の重爆は撃墜されたり故障で引き返したが、内1機が北飛行場に強行着陸し、十数名の隊員は33機の飛行機を爆破、多量のガソリンを爆破炎上させて、2日間に亘って飛行場を使用不可能にさせた。



義烈空挺隊の祈念碑



胴体着陸した義烈空挺隊の97式重爆

### ●中飛行場・普天間飛行場

私は次に、北飛行場から米軍の侵攻した道筋に沿って南下した。最初は中飛行場（嘉手納飛行場）の傍を通り抜け、次に普天間飛行場の傍を通った。普天間飛行場は当時は存在していなかったが、戦後米軍が民間用地を接收して飛行場を新しく作ったもので、道路から中を見ることが出来る。現在問題になっているオスプレーも10機ほど並んでいたのでも写真を撮ったが遠かったので小さくて良く見えない。



普天間飛行場の前にある看板

普天間基地は町の真ん中に陣取っているのがこれが移転すれば沖縄の再開発に大きな効果を

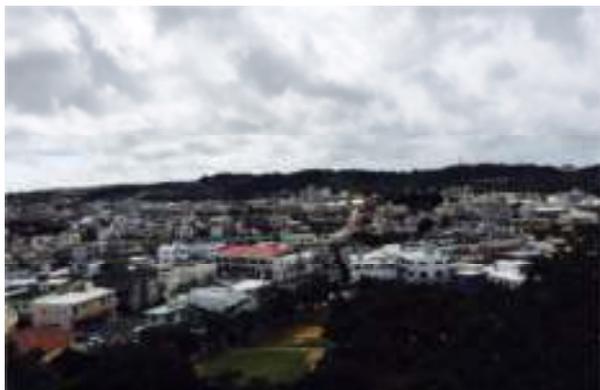
もたらすものと思われるが、沖縄県民は必ずしも歓迎していない。しかし、地元の人に話を聞いてみると、辺野古に移転することは新しい基地を増やす先例を作ることになるので反対しているという意見の他に、戦時中の米軍の非人道的な行為や現在の米兵の程度の悪さ、事故が起きた時の裁判権の不平等等による嫌悪感によるところが多いように見受けられた。

上陸した米軍は日本軍の前哨線を逐次突破し、4月5日には、丁度私の滞在しているラグナガーデンホテルのある宜野湾の反対側の東海岸沿いにある中条村の丘陵地帯の日本軍守備隊150名が立て籠っていた洞窟陣地に達し、壮絶な争奪戦が繰り広げられた。7～8回に及ぶ米軍の総攻撃を跳ね返したが、翌日6日には米軍の手に落ちた（ビナクルの戦い）。米軍の主力は次の目標を第62師団が守備している嘉数高地に向けられた。一方、大本営は一挙に劣勢を挽回すべく、4月6日、菊水作戦を発動した。この作戦には陸海の飛行機500機が投入され、更に戦艦大和を含む第一遊撃部隊を出動させた。しかし、その結果は、敵の艦船40隻を撃沈破するという戦果を挙げたが、飛行機200機の喪失と戦艦大和が撃沈されるという痛手を被った。この時期に、第32軍も大本営の要望により、北・中飛行場の奪回作戦を強行した。4月8日と12日2回の夜襲を試みたが、第62師団の2個大隊が全滅するという打撃を受けて、却って持久戦の寿命を縮める結果となった。その後、5月始めまでは、嘉数戦線は膠着状態になったが、第32軍の長参謀総長の発案で、総攻撃を行なった。総攻撃は5月4日、5日に決行され、これに呼応して、大本営は空からの援護として菊水5号作戦と第六次航空総攻撃を発動した。しかし、この総攻撃も、米軍の圧倒的な火器による反撃により、白兵戦まで持ち込むことができず、予備軍であった第24師団の6千名以上の戦死者を出し、敗退するという結果に終わった。

### ●嘉数の戦い

次に向かったのは嘉数、ここは宜野湾市の南端にある丘陵地帯で、最初に本格的な戦闘が行われた地帯である。先にも述べた様に沖縄の南部地帯は中央の尾根の両側に魚の骨のように左

右に丘陵が何層に亘って延びている。この丘陵地帯は珊瑚礁による無数の洞窟が存在し、更に戦争に備えて作った洞窟陣地に砲兵隊、歩兵部隊が隠れて陣取っている。一つの陣地が突破されても、大砲は後方に向けても設置されていたので、敵軍の後ろから砲撃し、全滅させることが出来る。米軍の攻撃は何十回と繰り返されたが嘉数陣地だけで約1ヶ月持ちこたえられた。



**嘉数の市街地 向こうに見える丘が日本軍の洞窟陣地**

米軍は、日本軍が予備軍まで使い果たしたことを察知するや、すかさず、攻勢に出て、5月11日には首里城のすぐ近くにあるシュガーローフ（現在的那覇市のおもろ町）迄進出してきた。ここを守る日本軍は独立混成第44師団で、寡兵ながら、5月19日迄持ちこたえた。シュガーローフの東側にあるチョコドロップ（現在的那覇市の石嶺町）は第24師団が守備していたが、数十回攻撃にも耐えたものの最後は火炎放射器の攻撃により、20日には略全滅状態になった。

### ●シュガーローフの戦い

次の戦線は那覇市の真ん中にある丘陵地帯で、米軍からシュガーローフ（現在のおもろ町）、チョコドロップ（現在の石嶺町）といわれた丘陵陣地である。ここでも激戦が行われたが、最後は米軍の火炎放射器で5月20日頃に全滅した。シュガーローフとは砂糖を付けた菓子パンのことで、この丘を争奪している米軍と日本軍を甘いパンに群がる白アリと黒アリに見立てて米軍が名づけたものである。

しかし、今ではおもろ町地帯は米軍家族の居住地帯であったが返還され、億ションと云われるマンションが建ち並んでいて、昔の戦争の面影は全くない。



**シュガーローフの丘から市街地を望む**

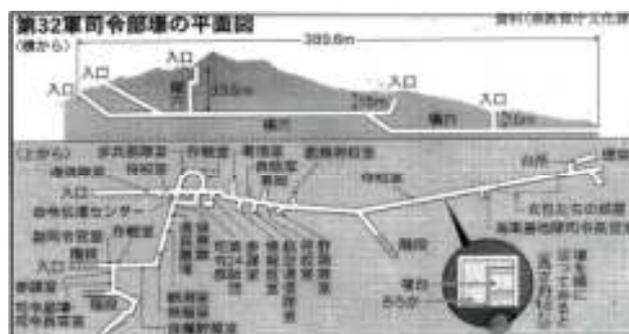


**おもろ町の億ション**

### ●首里・第32軍司令部

私は次に首里城を訪れた。当時の首里城は米軍の爆撃により完全に崩壊したが、現在は見事に復元されている。

当時の首里城の下の洞窟に沖縄の日本軍総司令部の第32軍司令部が置かれていた。坑道の長さは延約1kmに及ぶと云われている。軍司令部洞窟の入り口が丘の中腹に口を開けている。また、その近くに、陸軍病院本部、第1、第2、第3外科の洞窟があった。



**第32軍司令部壕の内部**



**第32軍司令部壕**

米軍は5月20日には、那覇市の東側の運玉森（コニカルヒル）方面に進出してきたので、第32軍は撤退を決め、5月26日、密かに撤退を開始し、30日に軍司令部を本島南端の摩文仁に移した。この撤退は米軍の不意を突いたため約3万名の将兵が殆ど損害を受けることなく移動に成功した。

一方、大本営は5月11日から24日の間、空からの特攻を続け、旗艦バンカーヒル及びエンタープライズを大破するという戦果を挙げていた。さらに、5月24日には米軍の占領した飛行場を破壊するために、義烈空挺隊を出撃させた。

海軍部隊は、今の那覇空港の海軍飛行場の傍の小禄に司令部を置いていたが、第32軍の首里撤退によって孤立し、10日間に亘って善戦したが、6月11日の米軍の戦車による攻撃に耐え切れず、司令官太田中将は、牛島軍司令官宛に玉砕する旨打電をした後自決した。

米軍の南下に伴い日本軍の戦線崩壊は次第に大きくなり、喜屋武地区（糸満市）を守備していた軍主力の第24師団も6月17日、師団としての組織的抵抗が不可能な状態となる。そのような状況下、牛島軍司令官は6月23日、長参謀総長と共に自決した。大本営も6月25日、沖縄本島における組織的な戦闘の終結を発表した。

しかし、その後も残存兵による散発的な戦闘は本島各地で継続されていた。例えば、摩文仁軍司令部の近くの国吉（糸満市）では第24師団のある連隊の生き残り約100名が立て籠り、終戦後の8月29日迄頑張っていたが、最後は連隊長の判断で武装解除を受け入れている。

●**沖縄戦終焉の地**

シュガーローフの戦線の崩壊によって、軍司令部にも危機が迫ってきたので、5月26日密かに軍司令部、周辺の守備隊、病院関係者等が脱出、本島南端の摩文仁に移転した。

私もその後を追って摩文仁に移動した。

まず最初に平和祈念公園を訪れた。園内には沖縄戦の総ての戦没者の名を刻んだ「平和の礎」、平和祈念像を安置する「沖縄平和祈念堂」や「平和祈念資料館」などがある。

そこから一寸離れた糸満市に「ひめゆりの塔」がある。ここには沖縄陸軍病院の看護要員として動員された沖縄師範学校と沖縄県立第一高女の「ひめゆり学徒隊」が立て籠っていた第3外科壕がある。生徒・教師240名中136名がここで命を落としている。

そこから少し離れた丘の中腹に陸軍病院の本部壕があった。



**ひめゆりの塔 下の穴が壕の入り口**



**陸軍病院本部壕 糸満市**

平和記念公園の後ろに小高い丘がある。沖縄戦では殆ど日本中の部隊が戦っているの、ここには各県ごとに何十という慰霊塔が並んでいる。

そして一番高い丘の上に牛島満軍司令官と長  
勇参謀長の自決を偲ぶ忠魂碑がある。



牛島軍司令官と長参謀長の忠魂碑



沖縄島の南端 ここが終焉の地である



橋の奥に第32軍司令部壕の入口がある

6月23日牛島軍司令官の自決によって沖縄  
戦は実質的に終結した。

私はこの壕の前に花束と線香を捧げ、  
ご冥福を祈り本日の慰霊の旅を終わりにした。

